1953

昭和28年度活動報告

阪神六大学春季リーグ戦

◇5月4日山本球場

大学大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	2
甲南大	1 2 1	1 1 0	0 0 ×	6×

バッテリー
(甲)緒方・左雲—田中
(学)秋田・阪本—国分・香川

◇5月6日
甲南大8—5大学大

◇5月7日
甲南大14—0大市大

◇5月8日
大市大0—11×甲南大

◇5月9日山本球場

甲南大	5 0 0	0 1 0	0 0 0	6
大商大	0 1 0	0 0 0	0 0 0	1

▽二塁打伊藤(甲)
バッテリー
(甲)村井・高橋(優)—田中
(学)津田・香川—島田・小泉

◇5月11日
大商大1—9×甲南大

◇5月13日山本球場

甲南大	0 1 0	0 1 0	2 2 0	6
大工大	2 0 0	1 0 0	0 0 0	3

◇5月14日
甲南大6—0大歯大

◇5月15日
大歯大0—11×甲南大

◇5月18日尼崎市営球場

大工大	0 0 0	0 0 0	0 0 1	1
甲南大	2 0 2	0 3 0	0 0 ×	7×

第三回全近畿大学野球大会

◇6月9日山本球場

甲南大	1 0 0	4 0 0	3 2 2	12
大薬大	0 3 0	0 0 0	0 1 0	4

▽三塁打藤原(甲)・岡田(薬)
▽二塁打伊藤(甲)
バッテリー
(甲)高橋・増田・左雲—高木・奥田
(薬)木村・室・岡田—前野・岡田・松本

◇6月11日山本球場

大医大	0 0 1	0 0 0	0 0 0	1
甲南大	0 0 0	0 0 0	0 2 ×	2×

▽二塁打安村・村上(医)
バッテリー
(甲)村井・緒方—奥田・高木
(医)松原—村上

◇6月12日山本球場（準々決勝）

甲南大	5 0 1	0 2 0	2	10
姫工大	0 0 0	0 1 0	0	1

▽三塁打青木(甲)
▽二塁打村井・伊藤(甲)
バッテリー
(甲)村井・高橋—奥田・高木
(姫)藤井・岡本—北風・三木
※7回コールドゲーム

◇6月15日山本球場（準決勝）

甲南大	1 0 0	0 0 4	0 0 0	5
大商大	0 0 0	0 3 0	0 0 0	3

▽三塁打高橋優(甲)
バッテリー
(甲)緒方—高木
(商)香川—高橋

◇6月15日山本球場（決勝戦）

甲南大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 1	1
大工大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0	0

〔甲南大〕		打	安	失
③	藤原	5	2	0
④	橋本	5	0	0
⑧7	中川	5	1	0
⑨	伊藤幹	3	0	0
⑦	西村	3	1	0
PH	伊藤忠	0	0	0
8	高橋利	1	1	0
⑥	近江	5	0	0
⑤	高橋優	5	1	0
①	増田	3	2	0
②	奥田	1	0	0
2	高木	2	0	0
	計	38	8	0

〔大工大〕		打	安	失
③	春田	4	1	0
⑨	井上	4	1	0
④	景山	3	0	0
⑥	池本	4	0	0
⑧	神崎	4	0	0
⑦	和沢	4	1	0
①	中田	3	1	0
⑤	前田	2	0	0
PH	山下	1	0	0
②	福田	4	0	0
	計	33	4	0

▽二塁打春田(工)
バッテリー
(甲)増田—奥田・高木
(工)中田—福田
※延長11回

オープン戦

◇6月24日甲南大球場

神外大	0 0 0	1 1 1	0 0 1	4
甲南大	0 0 5	0 1 0	0 0 ×	6×

バッテリー
(甲)増田・左雲・緒方—高木
(外)林・大石—松井・高下

第二回対学習院定期戦

◇6月26日甲南大球場

学習院	1 0 0	0 0 0	0 0 0	1
甲南大	1 0 1	0 3 0	0 0 ×	5×

バッテリー
(甲)緒方・松田—高木
(学)島村—中島

第一回西日本大会

◇7月30日岡山県久世町球場（1回戦）

松山商科大学	0 0 0	0 0 0	0 0 1	1
甲南大学	0 0 2	1 0 1	1 0 ×	5×

▽二塁打越智(松)・中川(甲)

〔甲南大〕		打	安	失
③	藤原	5	1	1
④	青木	2	0	0
6	上田	1	1	0
⑧	中川	5	4	0
②	高木	3	0	0
2	奥田	0	0	0
⑦	西村	3	1	0
⑨	伊藤	3	2	0
⑤	高橋優	2	1	1
①	村井	2	1	0
1	緒方	2	0	0
1	左雲	0	0	0
⑥	近江	1	0	0
4	橋本	2	0	0
	計	31	11	1

〔松山商大〕		打	安	失
⑦	加藤	4	1	0
③	綾	4	2	0
⑥16	中村	2	0	0
⑨	越智	4	2	0
⑧	紀伊	3	0	0
②	高野	2	0	1
56	大谷	1	1	0
①61	志賀	4	0	1
④	今井	3	0	0
⑤	山田	3	0	0
	計	30	6	2

甲南大松山商大に快勝

戦評
攻守に勝る甲南大学は松山商大投手陣を打込んで三回には三安打で二点四・六・七回に各一点と長短十一安打を放ち二回戦に駒を進めることになった。これに反して松山商大は、二・四・六回とスコアリングポジションにランナーを進めながら拙攻と打撃不振でものに出来ず、わずかに九回甲南大が気をゆるめたすきに四球で一点を拾ったのみであった。

◇8月1日岡山県久世町球場（準々決勝）

甲南大学	000	000	001	0	1
関西学院大学	001	000	000	1×	2×

▽本塁打大成(関)
※延長10回

〔関西学院大〕	打	安	失
⑥ 正田	5	1	0
④ 稗田	3	0	0
⑧ 荒石	5	0	1
③ 平田	4	2	0
⑨ 山口	4	1	0
⑦ 鳥居	4	1	0
⑤ 大西	2	0	0
① 村田	4	0	0
② 大成	4	2	0
計	35	7	1

〔甲南大〕	打	安	失
③ 藤原	2	1	0
④ 橋本	1	0	0
⑧ 中川	4	0	0
② 高木	4	1	0
⑦ 西村	4	2	0
⑨ 伊藤忠	1	0	0
9 村井	3	0	0
⑤ 高橋優	4	0	1
① 増田	3	0	0
⑥ 近江	3	1	0
計	29	5	1

甲南大善戦及ばず

優勝を目ざす両チームの最大難門だけに本大会初の延長戦となり、始めから手に汗握る熱戦を展開、甲南大の剛球増田、関学大軟投の村田との対戦はわずかに長打力に勝る関学大は三回大成が本大会初の本塁打を左翼席三百二十フィートにたゝきこみ一点を先取しこの一点をめぐって両軍火花を散らす攻防を展開、最終回に至り甲南大必死の反撃は藤原内野安打に出塁、橋本の送りバンドで二進、四番高木の一打は二塁手をあやまらせて藤原を返し同点とした。かくて延長戦に入って攻守に一日の長のある関学大は十回安打で、出塁の大成は正田の一撃が野選となり稗田のバンドに送られ一死、二・三塁となる。ここで関学大は荒石にヒッティングを命じその一撃は中堅犠飛となり大成を本塁にむかえいれて熱戦十回に終止符を打った。

第五回全日本大会

◇8月16日奈良県丹波市町球場（1回戦）

甲南大	003	000	000	3
慶応義塾大学	000	000	000	0

▽二塁打奥田(甲)・小坂(慶)
バッテリー
(甲)緒方―高木
(慶)萩尾・桧山―内田

〔慶大〕	打	安	失
④ 高島	3	0	0
⑨ 小坂	4	1	0
③ 佐藤	4	0	0
⑦ 大沢	4	0	0
② 内田	3	1	0
⑧ 石橋	4	1	0
① 萩尾	2	0	0
1 桧山	2	0	0
⑤ 原	3	1	0
⑥ 白沢	2	0	1
PH 萩原	0	0	0
6 黒井	0	0	0
計	31	4	1

〔甲南大〕	打	安	失
③ 藤原	5	2	0
④ 橋本	2	0	0
⑧ 中川	4	1	0
② 高木	2	0	0
PR 青木	0	0	0
2 奥田	1	1	0
⑦ 西村	4	1	0
⑨ 伊藤	3	0	0
⑤ 高橋	2	0	0
① 緒方	4	0	0
⑥ 近江	4	1	2
計	31	6	2

東京六大学の雄慶応を破る

戦評

負けた慶応もまさか一コロとは思っていなかっただろう。ましてネット裏の雀も二度ビックリ。甲南大は学内に硬式部を持たず野球と云えば軟式を称し選手にも粒がそろいまして恵まれた環境のうちに楽しく朗らかに野球をエンジョイしているのでどんな実力を発揮するのだろう。関西にあってはなかなか飛ぶ機会がなかったが、一たび大空に舞うとコメットの様になるらしい。とにかく緒方の好投と三回一死後近江の左前安打、藤原の中前安打、橋本の四球で満塁とし中川の三遊間適時打で二点をあげ敵失も手伝って慶大から致命的な三点をうばい、バックの攻守に試合はトントンと進み慶大は四安打を散発したのみで完敗した。慶大は春のリーグ戦以来最低のバッティングにあえいでいたので当然の結果だ。

◇8月17日（準々決勝）

甲南大	002	000	000	2
関西大	330	000	000	6×

▽三塁打岸野(関)
▽二塁打大東・島津(関)

〔関西大〕	打	安	失
⑨ 岸野	5	2	0
⑧ 井上	2	0	0
8 西山	1	0	0
7 堀谷	4	0	0
⑤ 神戸	4	1	0
② 大東	3	1	0
⑥ 速水	4	0	0
⑦8 島津	3	2	0
③ 林	1	0	0
PH 平場	1	1	0
PR 奈良	0	0	0
3 吉本	2	0	0
① 北川	4	1	0
④ 佐藤	3	0	0
計	34	8	0

〔甲南大〕	打	安	失
③ 藤原	4	0	0
④ 橋本	3	1	0
PH 青木	1	0	0
⑧ 中川	4	2	0
② 高木	4	0	0
⑦ 西村	4	1	1
⑨ 伊藤	4	1	0
⑤ 高橋優	4	0	0
① 増田	3	0	0
1 村井	0	0	0
⑥ 近江	3	2	0
計	34	7	1

戦評

慶応を破り好調の波に乗る甲南大は地元関西の古豪関大には力及ばず敗退した。関大は甲南大増田投手の立ちあがりを攻めて、まずトップ岸野が左中間に三塁打し井上とのスクイズで手堅く一点をあげ神戸の四球に続いて、大東が左翼線に二塁打、速水の犠打と島津の二遊間痛打で計三点を上げて甲南大のドギもをぬき二回には二安打二四球と一敵失で又も三点を追加、関大のお家芸たる速攻は甲南大をよせつけず、わずかに四回甲南大は橋本、中川、高木のクリーンアップトリオが北川に連続安打を浴びせ二点をかえしたのみで七・九回に訪れた無死出塁のチャンスにも作戦が荒すぎて反撃機をつんでいるのは惜しまれる。ともあれ実力の差が判然としていた。

兵庫県大学秋季大会

◇9月3日明石球場

姫工大	000	001	0	1	
甲南大	203	014	×	10×	

▽三塁打近江(甲)
▽二塁打中川(甲)
バッテリー
(甲)緒方・左雲―奥田
(姫)荒木・藤井―北風
※七回コールドゲーム

◇9月4日明石公園球場

甲南大	200	000	033	010	0	9
神商大	210	005	000	010	1×	10×

▽三塁打中川(甲)
▽二塁打藤原・高橋優(甲)・福田・北村(商)
※延長13回

戦評

甲南は右翼への長し打ち、商大は強引に左翼線に引っぱる打法と対照的な打撃のチームで冒頭より長短三安打の攻め合いとなり互角のスタートを切った。しかし商大は六回敵失と増田投手の不調に乗じ福田の二塁打等で大量五点を入れて大勢を決したかに見えたが八回に至り甲南大は得意とする後半の追撃に移り中川の三塁打、村井の右翼線安打等で三点、九回には2四球三安打で試合を振り出しに戻した。延長十三回、二盗の木村を北村の劇的な左翼線二塁打で還し商大の勝利となった。

オープン戦

◇11月2日大商大球場

広島大	000	010	000	1
甲南大	011	000	00×	2×

阪神六大学秋季リーグ戦

◇11月4日長居球場

甲南大	030	100	000	4
大工大	000	110	000	2

秋季リーグ戦々績表

1位　甲　南　大
2位　不　　明
3位　不　　明
4位　不　　明
5位　不　　明
6位　不　　明

〔表彰選手〕

最高殊勲選手　伊藤忠一（甲南大）
最優秀選手　不　明
首位打者　不　明

第三回学習院定期戦

◇11月14日学習院大球場

学習院	010	000	001	2
甲南大	000	030	00×	3

バッテリー
（甲）緒方—奥田

◇11月15日学習院大球場

学習院	201	000	000	3
甲南大	060	000	00×	6×

（甲）高橋利・緒方—奥田

思　い　出　（甲球　部創立十五年記念号より）

第一回卒　伊藤　忠一

〔思い出の試合〕　全国大会（於天理市）に甲南大としては初めて代表校に選ばれて小生も六番ライトとして出場した。第一回戦東京六大学の慶応大と対戦した。大方の予想を裏切り緒方投手の好投、当時第二捕手であった今は亡き奥田投手の適時打により三対一で勝利を治めた。池浦主将を中心にがっちりまとまったチームワークの勝利と言うことができる。学生数も少なく大学として歴史も浅かった当時、東京六大学の一角を破ったのは我が野球部が初めてであったと記憶する。

〔回想〕　高校時代苦手であったアウトコースを大学に入り習得したが逆にインコースが全々打てなくなり安打は殆んどセンターより右に飛んだ。当時所属した阪神六大学（近畿六大学への加入は認められなかった）の昭和二十八年秋季リーグ戦に優勝し幸にも最優秀選手に選ばれた。小生の大学生活、野球生活で得た唯一の賞状・カップであり憶しい思い出として保存している。

創部当時の思い出

第一回卒　赤松　幹雄

昭和26年3月甲南高校3年A組の野球メンバー池浦、伊藤、森谷、赤松の4名が集り同年4月21日に大学が開学されると同時に野球部をつくろう。そして当面は費用のかかる硬式野球部はつくらず準硬式野球部のみとする。この方が優秀なプレイヤーの一元化ができる又費用が少くても何とか出来る。グランド問題は学校当局の考える事で我々のレベルでは手が出ない。とにかく4人の意見はまとまった。だが心配なのは100人余りの学生のなかで何人集められるか。ポスターなどの効果でやっと15人があつまり何とか野球ができる事となった。

扨　実戦で力をつけようと練習試合を多く組み色々な大学と試合した。第一戦は神戸外大で12—11で負けそのあと9試合とも負け10連敗。チーム内は何だかギクシャクしている。技もさることながらお互いのコミュニケーションを計らねばならない。神戸三宮の小料理屋で宴会を開き飲みかつ食べ野球以外の面でも親しくなった。27年度こそ良い成績をおさめねばと、こんな時に三田学園のエース高橋（利）他3名の入部があり、ゆとりあるチームが出来あがった。とにかく阪神六大学で五戦全勝、近畿大会に於ても全勝した。そして西日本大会、全国大会に参加し、そこそこの成績を納める事が出来た。

今にして過去50年を振りかえれば、まあ中の上と云った所か。

以　上

（2000年3月12日）